

## 新しい発想発掘手法

世の中では、新たに何かをしようとしたときに、あるいは変革を求めようとする際には、よく「新たな発想を・・・」「発想の転換を・・・」などと唱えられることが常道のようなものであるが、では一体どうすれば上手い具合に適切な発想が発掘できるのだろうか。

そこで、世間一般的に既に用いられている手法のいくつかを紹介しよう。

## 【ブレインストーミング法】

これは思考心理学の研究成果の一つとして開発された方法で、一定の人々（通常は複数人）から、ある概念について思いついた事柄を述べて貰う一つの方法である。

この方法は、一人一つの言葉や概念を順番に述べてゆき、もうそれ以上関連した言葉などが出てこなくなるまでこれを繰り返して行くという方法である。

例えば、少人数の場合などでは順番がすぐに廻ってくるために、とても辛くて厳しい方法となる。このようにして、苦しい中から何とか関連するものを思い起こすと、普段では思い付かないような発想が生れてくるため、創造的思考などを必要とする場面で良く用いられる。

この苦しさは、まるで頭の中を嵐が荒れ狂っているように例えられるため、この名前が付いている。

具体例としては、企業などが新製品開発を行う際の新しい概念を生み出す時などに使われることで有名である。

## 【発想のヒント】

私たちに、色々な発想を促す手がかり（心理学ではこの手がかりのことをキュー（Cue）と呼んでいる）を与える手法として【1H5W】と呼ばれるキーワードがある。

これは、英単語のHow, What, When, Who, Where, Why, の頭文字を採ってそう呼ぶことはよく知られている。

その意味するところは、発想の手がかりとして、今考えあぐねているテーマを、この六つの次元の方向に展開してみなさい、ということである。

例えば、心理学について当てはめてみて、方法についてのものはないか、時間を表現したものはないか、人の名前がついたものはないか、場所ではどうか、理由ではそうか、といった具合に考えてみることである。その結果、方法にかかわる次元では実験、応用、基礎などの言葉が出てくる。時間次元では、現代、古代などが、人名次元では、フロイト、ユングなどが、場所次元では、西洋、東洋などが、理由次元では、マスコミ、法律、裁判などの言葉が出てくるのである。

このような発想のキューを頭に置きながら思考を巡らすという方法も思考心理学からの知見で生れたのである。

この方法も、新しい発想を促す手だてとして、実際の企業などでは頻繁に使われているものの一つである。

## 【KJ法】

日本人の川喜多二郎氏が開発した発想法の代表的なもので、特に分類概念を作成する際には有効であり、多用されている方法である。

その方法は、一枚のカードには必ず一つの内容を書き、これを原則として、まずバラバラな情報を作成する。次にそれらを意味的な部分が同じようなもの同士を集めてまとめ、そのまとまった集団に再び仮の命令をする。この作業を順次繰り返していけば、最終的には、全体が整理された形での一つの集合体に至るはずである。それを全体として描くことが出来るならば、それは巧みなツリー構造をもった概念体系となるはずである。また当然、このような体系が出来上がれば、その欠落している部分も発見することが容易に可能になり、今まで気付かなかった新しい発想も促されることになるという巧妙な方法である。

以上、極めてポピュラーな手法を挙げ連ねたが、日頃の業務の中では「慣れ」や「面倒くさい」などが邪魔をして、キチンとした形（各自勉強してみられたい）では必ずしも行われていないのではなかろうか。

本来は新しい発想発掘のための手法だが、行き詰まりの解消法としても、一度原点に帰り、原理原則的手法を試すことも有効ではなかろうか。

以上

